

いずれの群も無効例や再燃例はなく、両群とも同等の臨床効果であった。

なお、今回A群とR群で年齢層に差を認めた理由は、AZMの細粒に対する服薬コンプライアンスが悪いためと考えられた。

7 ビアペネムが著効した呼吸不全を伴う重症肺炎の1例

出雲 雄大・木口 俊郎・山口美沙子
立川総合病院呼吸器内科

患者は80歳女性。主訴は呼吸困難。現病歴は2002年10月13日頃から呼吸困難、歩行困難となり、当院内科外来を受診。胸部レントゲン上、両側の浸潤影を指摘され当科紹介、入院となった。両側肺野の広範な浸潤影、白血球数20,200、CRP 42.9、ESR 42.9と高度炎症反応を認め、動脈血液ガス分析ではPCO₂ 47.5、PO₂ 40.9とⅡ型呼吸不全であり、入院当日よりビアペネム0.6g/日、フルコナゾール200mg/日、メチルプレドニゾロンナトリウム40mg/日を投与した。第3病日には白血球14,800/μL、CRP 19.2 μg/dLと改善したため第8病日まで投与し、第14病日にはCRP 0.3 μg/dLと正常化し、第15病日に軽快退院となった。喀痰培養でKlebsiella, Enterobacterが検出され起炎菌と考えられた。重症肺炎においてはビアペネムのような広域の強力な抗菌薬を速やかに使用することが救命、治癒につながると考えられた。

8 気管切開症例における緑膿菌に関する検討

櫻井 賢・小野 徹・大竹 一平
戸谷 収二・金子 恭士・又賀 泉
日本歯科大学新潟歯学部口腔外科学
第2講座

1993年4月～2003年3月の10年間に日本歯科大学新潟歯学部附属病院第2口腔外科へ受診した口腔悪性腫瘍患者277例のうち、気管切開を施行した62症例を対象に検討を行い、そのうち気管切開部における細菌検査を施行し、緑膿菌が検出率された15症例について検討を行った。気管

カニューレ装着期間は、平均58.8日と長期に渡るものが多く認められた。薬剤感受性試験の結果、IPMにおいて感受性を示すものと耐性を示すものがあつた。また、IPMで感受性を示すものの中においてLMOXで感受性を示すものと中等度耐性を示すものとの傾向は大きく3つのタイプに分けられた。緑膿菌の抗菌薬に対する感受性は年次経過により変化し、薬剤感受性低下を示す抗菌薬が増加している傾向にあつた。緑膿菌の薬剤耐性は臨床で使用される抗菌薬の種類と投与期間に影響される可能性があるため慎重な投与が必要であると考えられた。

9 Moraxella catarrhalis が起因菌となり、重症化を来した肺炎の1例

西堀 武明・河辺 昌哲・中山 秀章
塚田 弘樹・下条 文武
新潟大学大学院医歯学総合研究科
(第二内科)

症例は、78歳の男性。以前より心房細動と慢性肺気腫を指摘されていた。平成15年2月3日に呼吸困難も出現し、救急車で当院内科外来を受診し、低酸素血症も認め、当科に緊急入院した。右上肺野に最も強く、両側下肺野にも広がる浸潤影を呈し、急速に進行した両側の肺炎と診断した。喀痰検査ではグラム陰性球菌が好中球に貪食している像が認められ、培養でもMoraxella catarrhalisが同定された。人工呼吸管理となったが、カルバペネム系を主体とした抗菌薬治療で改善した。Moraxella catarrhalisはIgAプロテアーゼを産生しないため菌の粘膜内侵入が困難となっているため、軽症例が多い傾向があるとされているが、本症例のように心肺に基礎疾患を持つ場合は重症化する場合もあり注意が必要である。